

# 関係詞の効果的指導法

## －節の機能に基づく指導順を中心に－

大塚 巖・油井 智子

### An Effective Teaching Method of Relative Clauses : Centering on the Order of Teaching Proposed on the Basis of Functions of Relative Clauses

Iwao OTSUKA and Tomoko ABURAI

#### 概要

関係詞は多くの日本人にとって習得が難しい項目である。本研究では関係詞の習得が日本人の学習者にとって困難である要因を言語学的に明らかにし、さらに、その困難さを克服する指導法として、「階層的指導法」と「節の機能に基づく指導順」を提案する。そして、実際に外国語として英語を学ぶ高校生2年生にこれらの指導法を用いて教えることによって、その指導法の有効性を実証しようとするものである。

#### はじめに

関係詞はこれまで日本人の英語学習者にとって最も習得が難しい項目といわれてきた。現在、経済や情報のグローバル化に伴い、実践的なコミュニケーション能力の育成が叫ばれている。それに伴い、さまざまな指導法が開発され、実践されている。しかし、こうした取り組みにもかかわらず、関係詞は依然として多くの学習者にとって習得が困難な項目である。関係詞を効果的に教えるには、英語と日本語の根本的違いに着目した指導法の工夫が必要である。

本論文では、前半部分で英語と日本語の根本的違いに焦点を当てて、関係詞の効果的指導法を考察する。まず、1章では関係詞習得の困難さの原因を言語学的に探る。次に2章では1章で述べた原因を克服する具体的指導法を提案する。最後に、3章では2章で提案した指導法を用いて実験を行い、指導法の有効性を証明する。

#### 1 関係詞習得の困難さの原因

本章では次の五つの言語学的視点から、関係詞習得の困難さの原因を考察し、その克服法を探る手立てとする。

- ① 名詞句の接近度階層から見た困難さ
- ② 主要部の位置の違いから生じる困難さ
- ③ 関係詞節内の構造的違い－ 格、wh 移動、人称・数・時制の一致の存在
- ④ 言語単位の不連続による解析の困難さ
- ⑤ 関係詞節の節としての多様な機能に関わる困難さ

##### 1. 1 名詞句の接近度階層から見た困難さ

日本人にとって、主格関係詞より目的格関係詞の方が習得しにくい。つまり、次の(1a)よりも(1b)の関係詞の方が習得が困難である。

(1)

a. I know the boy who broke the vase there.

(SU)

b. I know a boy whom you met yesterday.

(DO)

名詞句の接近度階層 (Noun Phrase Accessibility Hierarchy, Keenan and Comrie (1977))によると、どの言語においても(2)に示す階層のある位置の語が関係詞化できれば、それより上位に位置する全ての語の関係詞化が可能になる。たとえば、目的格関係詞が理解できればそれより上位に位置する主格関係詞は当然理解できるのである。

## (2) 名詞句の接近度階層

主語 (SU) > 直接目的語 (DO) > 間接目的語 (IO) > 斜格 (OBL) > 属格 (GEN) > 比較級の目的語 (OCOMP)

日本人の英語学習者についても、Ohba (1995) が調査を実施したが、主格関係詞より目的格関係詞の方が習得が困難であるという結果を得た。

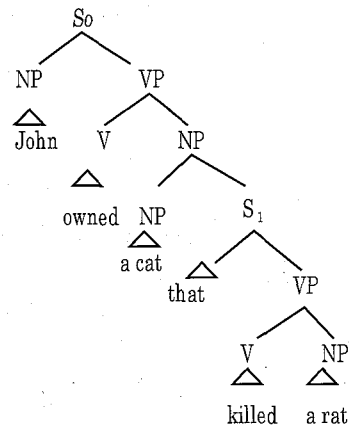
## 1. 2 主要部の位置の違いから生じる困難さ

日本人の英語学習者による誤答の多くが示すように、日本人の英語学習者は英語の右方向からの修飾が苦手である。この事実は日本語と英語の構造の違い、つまり主要部 (head) と補部 (complement) の位置の違いに原因がある。

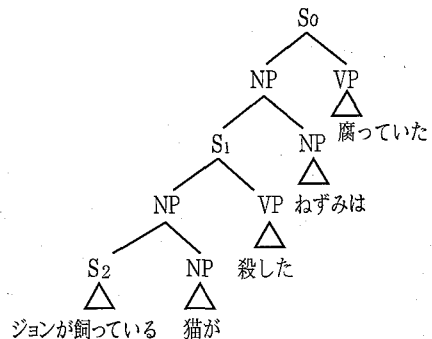
英語は主要部先頭型の言語であり、主要部が先で補部は後に来る。したがって修飾語句は被修飾語の右側に連なり、(3a) のような右枝分かれ構造 (right-branching) になる。一方日本語は主要部末尾型の言語であり、補部が先で主要部は後に来る。したがって修飾語句は被修飾語の左側に連なり (3b) のような、左枝分かれ構造 (left-branching) になる<sup>(注1)</sup>。

この主要部の位置の違いは日本人が英語を学ぶ時に混乱の元になる<sup>(注2)</sup>。したがって、日本人が英語を学ぶ時は、主要部の位置の違いに着目し、また、主要部先頭型に頭を切り替えて学習する必要がある。

## (3) a John owned a cat that killed a rat.



## b ジョンが飼っている猫が殺したねずみは腐っていた。



## 1. 3 関係詞節内の構造上の違い——格、wh 移動、人称・数・時制の一致の存在

格、wh 移動、人称・数・時制の一致は英語にはあるが日本語にはない特徴であり、これらは日本人が関係詞を習得する際の困難さの一因となっている<sup>(注3)</sup>。一般的に、第二言語の学習者にとって母語にある要素は習得が容易だが、母語にない要素の習得は困難である。したがって、日本人の英語学習者が格、wh 移動、人称・数・時制の一致を習得するには、意識を集中して全ての格、wh 移動、一致をチェックし、さらにそれを練習によって習慣化する域にまで習熟度を高めることが必要である。

### 1. 4 言語単位の不連続による解析の困難さ

日本人学習者にとって、次の(4c)、(4d)のような左埋め込みの関係詞節の含む文は、(4a)、(4b)のような右埋め込みの関係詞節を含む文より、関係詞節の認識が困難である。

(4)

a. I know the boy who broke the vase there.

b. I know the boy whom you met yesterday.

[右埋め込み]

c. The boy who broke the vase there is Tom.

d. The boy whom you met yesterday is Tom.

[左埋め込み]

それは左埋め込みの関係詞節は、右埋め込みの関係詞節より、主節における言語単位の中断、つまり情報処理上の不連続をひきおこし、関係詞節を認知するのが困難になるからである<sup>(註4)</sup>。したがって、指導においてはまず右埋め込みの関係詞節を教え、学習者が基本事項に習熟してから、左埋め込みの関係詞節を教える方が効果的である。

### 1. 5 関係詞節の節としての多様な機能に関わる困難さ

関係詞節の機能は形容詞的用法、名詞的用法、副詞的用法、非制限的用法など多様であるため、学習者が関係詞節の機能を的確に認識することは容易ではない。ところが、関係詞を教える時、教師は関係詞節内部の特徴を述べることに重点を置き、母型文における関係詞節の機能の説明はそれほど重要視しない。このことは学習者が関係詞を理解する際の困難の一因になっている。

したがって、教師は関係詞の運用面だけでなく、母型文における関係詞節の機能に着目させて教えることが必要である。その際、英語学習で既に習った類似する文法項目の機能にたとえることによって、学習者に関係詞の機能に気づかせると効果的である。つまり、形容詞用法の関係詞節は形容詞的用法の不定詞や形容詞的用法の分詞にたとえることによって説明する。名詞

的用法の関係詞は接続詞 that に導かれた that 節に、副詞用法の関係詞は接続詞 when に導かれた when 節に、非制限用法の関係詞節は二文を連結し、先行詞に付加的情報を追加する働きをする and, but, for などの等位接続詞にたとえて説明すると効果的である。

## 2 関係詞の効果的指導法

### 2. 1 階層的指導法

1章で述べた関係詞習得の困難さの①から④を克服する指導法として、「階層的指導法」(Hierarchical Teaching Method, 中森 (2002))がある。これは関係詞を従来から用いてきた二文結合方式(標準的指導法)でなく、関係詞を含む名詞句を生成せざるを得ないようなコンテキストを用いることによって、教えようとするものである。この指導法の有効性は中森(2002)によって実証されているが、本論文では、この指導法の各段階が①から④のどの困難さの克服を狙いとしているかを、段階ごとに検証する。

#### 第一段階

まず関係詞を必要とするコンテキストを設定し、学習者に主格関係詞節を含む名詞句を提示し、階層構造(hierarchical structure)すなわち関係詞節が名詞を修飾していることに気づかせる。例えば、花瓶を割った少年の絵を見せて、学習者たちに絵で示された状況を日本語で表現させる。それから(5a)と(5b)のような英語と日本語の関係詞節を含む名詞句を提示する。そして、関係詞節は英語では右方向から先行詞を修飾し、一方、日本語では左方向から先行詞を修飾するということを学習者に気づかせる。

(5)

a. 英語 the boy [who broke the vase]

b. 日本語 [花瓶を壊した] 少年

第一段階は1章で述べた関係詞習得上の困難さ

②(主要部の位置の違いから生じる困難さ)を克服することを指導目的とする。

## 第二段階

第二段階では主格関係詞を必要とするコンテキストを提示し、学習者に実際に関係詞節を生成させる。学習者はまず注意深く先行詞が人か物か、格が何であるかを確認し、相応しい関係詞を決定する。さらに、wh 移動、人称・数・時制の一致を確認しながら、関係詞節を含む名詞句を生成する。さらに、学習者は練習によって、関係詞節を含む名詞句が自動的に口をついて出るまで関係詞化の習熟度を高める。

第二段階の指導目的は1章で述べた困難さ③(関係詞節内の構造的違い—格、wh 移動、人称・数・時制の一致の存在)によって生じる困難さを克服することである。

## 第三段階

第二段階の主格関係詞節を含む名詞句の場合と同様のプロセスに従って、学習者は目的格関係詞節を含む名詞句を生成する。そして練習によって、関係詞を含む名詞句が自動的に生成できる程度まで関係詞化の習熟度を高める。

第一段階と第二段階では主格関係詞のみを扱い、目的格関係詞は扱わず、第三段階で初めて目的格関係詞を扱ったのは、関係詞習得上の困難さ①(名詞句の接近度階層仮説から見た困難さ)から見ると、目的格関係詞のほうが主格関係詞より習得が困難であることに配慮したためである。

## 第四段階

学習者は第二段階、第三段階で生成した関係詞節を含む名詞句を母型文に埋め込むことによって、関係詞節を含む文の生成を完了する。その際、母型文に関係詞節を含む名詞句を(6a)、(6b)、(6c)、(6d)という順序で埋め込む。つまり比較的易しい右埋め込みの[OS]及び[OO]、次に左埋め込みの[SS]及び[SO]という順

序で埋め込むのである。

(6)

a. Tom knows the boy who broke the vase.

[OS]

b. Tom knows the boy whom I met yesterday.

[OO]

c. The boy who broke the vase knows Tom.

[SS]

d. The boy whom I met yesterday knows Tom.

[SO]

下線部は先行詞と関係詞節

第四段階で重要なことは右埋め込みを左埋め込みに先行させることである。これは1章で述べた関係詞習得上の困難さ④(言語単位の不連続による解析の困難さ)を克服することを指導目的とするためである。また右埋め込みにおいても左埋め込みにおいても、主格関係詞を目的格関係詞に先行させるのは1章で述べた関係詞習得上の困難さ①(名詞句の接近度階層からみた困難さ)、つまり、目的格関係詞のほうが主格関係詞より習得が困難であることに配慮したためである。

このように階層的指導法は、始めに関係詞節が必要なコンテキストを用意し、学習者が関係詞の形容詞用法に習熟してから、関係詞節を含む名詞句を母型文に埋め込むという指導法である。

## 2. 2 階層的指導法の問題点

階層的指導法の有効性は who, whom, whose, which など形容詞的用法の関係詞の習熟を促す場合は実証済みであるが、これ以外の関係詞を教える時も有効であるかどうかは不明である。つまり従来の指導順で教えると、せっかく関係詞の働きは形容詞的用法であると強調しても、形容詞的用法の直後に名詞的用法、副詞的用法、非制限的用法が出現すると、学習者の関係詞理解に混乱を生ずることが懸念される。つまり階層的指導法だけでは、関係詞習得の困難さ①か

ら④は克服しているが、関係詞習得の困難さ⑤（関係詞節の多様な機能に関わる困難さ）の克服には応えていないのである。

### 2. 3 節の機能に基づく指導順

階層的指導法を用いて関係詞全体を効果的に指導するには、さらに1章で提示した関係詞習得の困難さ⑤（関係詞節の多様な機能に関わる困難さ）を克服しなければならない。そこで、関係詞習得の困難さ⑤の克服法として、本論文は「節の機能に基づく指導順（法）」を提案する。

この指導法は次の表1に表わすように、関係詞を（1）形容詞的用法の関係詞、（2）名詞的用法の関係詞、（3）副詞的用法の関係詞、（4）非制限的用法の関係詞の順に節ごとに分けて教え、学習者に節の機能を意識させることを意図したものである。

階層的指導法では関係詞節の形容詞的機能を

強調したが、この指導法では関係詞節は形容詞的機能だけでなく、接続詞のように名詞節や副詞節を導く機能もあることを強調する。つまり、関係詞の機能は多様であり、英文の正確な読み取りには関係詞節の機能を意識して読むことが重要であることを学習者に気づかせなくてはならない。そのためには、階層的指導法を用いて形容詞的用法に十分習熟させてから、次に名詞的用法、副詞的用法、複合関係詞、非制限用法という順序で、段階を追って教えていく必要がある。

現行の準文法教科書でとられている指導の順序は、基本的な関係詞の習得には効果的であるが、前置詞＋関係詞、関係副詞、複合関係詞、非制限用法の関係詞の習得に関しては学習者のエラーが多く、これらの項目の指導には必ずしも効果的とは言えない。しかし、「節の機能に基づく指導順」を用いて教えると、学習者の関係詞の機能に対する理解が深まると予想される。

表1 節の機能に基づく指導順

項目	関係詞の指導順		①関係詞の決定要素		②一致	③先行詞の表示の有無	④対応する日本語の有無	⑤関係詞節の機能
			先行詞が人か物かの区別の有無	格の区別の有無	人称、数、時制			
形容詞節	1	who, whom	○	○	○	○		形容詞節
	2	which	○	○	○	○		形容詞節
	3	whose		○	○	○		形容詞節
	4	that		○	○	○		形容詞節
	5	前置詞＋whom, which	○	○	○	○		形容詞節
	6	when, where, how, why			○	○		形容詞節
名詞節	7	what		○	○		○ ～もの、～こと	名詞節
	8	先行詞を含む when, where, how, why			○		○ 時、場所、方法、理由	名詞節
	9	whatever, whichever, whoever, whomever	○	○	○		○ ～でも(許容)	名詞節
副詞節	10	whatever, whichever, whoever, whomever	○	○	○		○ ～とも(譲歩)	副詞節
	11	wherever, whenever, however			○		○ ～でも(許容) ～とも(譲歩)	副詞節
非制限用法	12	who, whose, whom, which, 前置詞＋関係詞の非制限用法	○	○	○	○	○ and, but, for	(等位接続)
	13	when, where の非制限用法			○	○	○ and, but, for	(等位接続)

○印は該当することを表し、無印は該当しないことを表す

### 3. リサーチ

#### 3. 1 目的

本研究の目的は日本人の英語学習者に関係詞全般を教える時、「節の機能に基づく指導順」を用いて教えると学習者の関係詞理解が高まることを立証することである。

#### 3. 2 手順

石川県の公立高等学校（普通科）の二年生2クラス（AクラスとBクラス、合計68人）に、ライティングの時間5時間（平成14年9月19日から10月11日まで）の中で、A Stepping Stone to English Grammar（数研出版）を用いて、関係詞の指導を実施した。

Aクラス（統制群）では関係詞を教えるのに、「階層的指導法」を用いつつ、従来の指導順の教科書で教えた。Bクラス（実験群）では「階層的指導法」を用いつつ、「節の機能に基づく指導順」で教えた。Bクラスの教材は「節の機能に基づく指導順」に従って同教科書を編集し直したテキストを用いるが、教科書以外から引用した例文や補充問題については、両クラスとも共通の教材を用いた。

さらに、関係詞の指導の前に事前テスト、指導の後に事後テストを実施し、各クラスの指導前と指導後の伸びを比較した。

#### 3. 3 事前テスト、事後テスト

##### 設問の内容と狙い

付表1、3に示すとおり、事前テストと事後テストでは、関係詞の6項目について5問ずつ全部で30問出題した。問1から問5は関係詞の基本的用法、問6から問10は前置詞＋関係詞、問11から問15は関係副詞、問16から問20は名詞的用法、問21から問25は複合関係詞、問26から問30は非制限用法の関係詞の習熟度を調べる問題である。

学習者に実施するテストは、付表2、4のよ

うに、関係詞の項目を順不同に配列して出題した。

Aの問1から問20は（ ）に適当な関係詞を入れる問題であるが、学習者の関係詞に関する運用能力を調べる問題である。（ ）に入れる関係詞は多数の選択肢の中から選ばなければならない。なお、格や人称の影響を受けないthatは選択肢に入れなかった。また、選択肢を多数にして、従来の問題のように3択や4択にできなかったのは、ヒントとしての選択肢の出し方の違いが正答率に影響することを恐れたためである。

Bの問20から問30は和訳によって学習者の関係詞節の意味の認識能力を調べる問題である。学習者が複合関係詞の任意性と譲歩を区別できるか、また非制限用法の付加的な機能を理解しているか、また先行詞を正しく選べるかを調べるには、空所埋め問題より、和訳の方が適していると判断したためである。

##### 除外される項目

このテストではwhatやthatの慣用表現、as、but、thanなどの擬似関係詞、左埋め込みの関係詞節は除く。使用する単語や熟語は極端に難しいものは除く。

##### 採点基準など

各テストは難度がほぼ同等であり、採点基準は次のとおりである。各問題は1点で、30点満点である。Aの問題の中間点は無しとする。Bの問題は綴りのミスや時制、数に関するミスはミスとして数えないものとする。

統計処理にはT検定を用い、有意水準は $\alpha < 0.05$ とする。

#### 3. 4 結果と考察

事前テストと事後テスト（付表1、3）の結果は表2のとおりである。イタリック体の数字は両クラスにおいて、事前テストも事後テストも正答率が50パーセントを下まわった問題の数値を表わす。

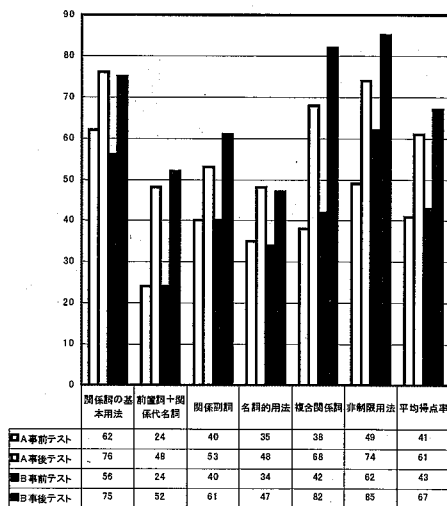
表2 事前テストと事後テストの正答率

	Aクラス					Bクラス				
	問題 番号	事前テスト		事後テスト		問題 番号	事前テスト		事後テスト	
		正答率	平均 正答率	正答率	平均 正答率		正答率	平均 正答率	正答率	平均 正答率
基本用法	1	65	62	91	76	1	74	56	91	75
	2	50		79		2	47		82	
	3	88		79		3	62		79	
	4	12		26		4	18		24	
	5	88		91		5	68		88	
前置詞＋関係詞	6	32	24	47	48	6	29	24	56	52
	7	26		53		7	32		65	
	8	26		62		8	26		71	
	9	18		35		9	21		44	
	10	12		32		10	3		15	
関係副詞	11	29	40	59	53	11	47	40	76	61
	12	74		59		12	56		62	
	13	15		65		13	12		53	
	14	15		0		14	6		3	
	15	65		76		15	71		94	
名詞的用法	16	35	35	56	48	16	35	34	62	47
	17	44		56		17	47		44	
	18	47		53		18	50		62	
	19	35		59		19	26		50	
	20	3		3		20	6		6	
複合関係詞	21	53	38	82	68	21	68	42	79	82
	22	32		68		22	38		82	
	23	26		59		23	35		79	
	24	21		44		24	6		68	
	25	47		79		25	50		85	
非制限用法	26	38	49	85	74	26	50	62	85	85
	27	35		76		27	44		85	
	28	59		56		28	71		76	
	29	47		59		29	53		76	
	30	59		79		30	76		85	

表2をグラフで表わすとグラフ1のようになる。白い棒はAクラスの正答率を表わし、黒い棒はBクラスの正答率を表わす。各色の左の棒は事前テストの正答率を表わし、右の棒は事後テストの正答率を表わす。

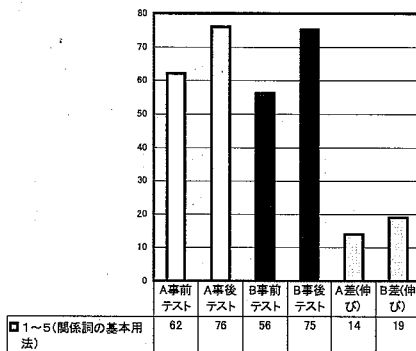


グラフ1 事前テストと事後テスト



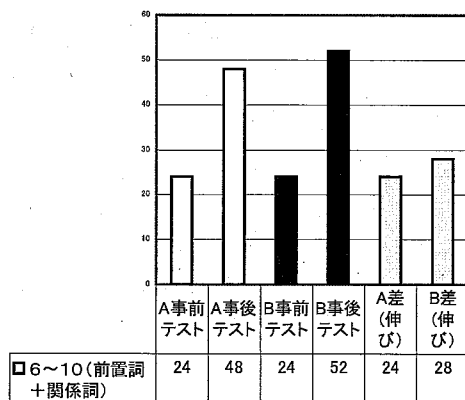
次に、表1を項目ごとにグラフ化し、両クラスの数値を検討する。

グラフ2 問1～問5（関係詞の基本用法）



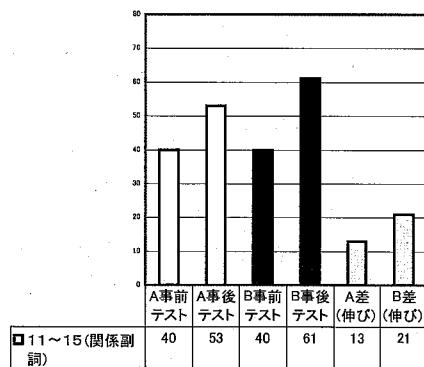
両クラスとも正答率は14%以上の伸びを示している。特に、Bクラスでは、問4を除くすべての問題で79%を上回って、伸びも大きく、「節の機能に基づく指導順」を用いて教えた効果があったと思われる。しかし、統計的にみると、両クラスの事後テストのt検定値 ( $t=0.24$ ,  $P<0.40$ ) は両クラスの間には有意な差がないことを表わしている。

グラフ3 問6～問10（前置詞十関係詞）



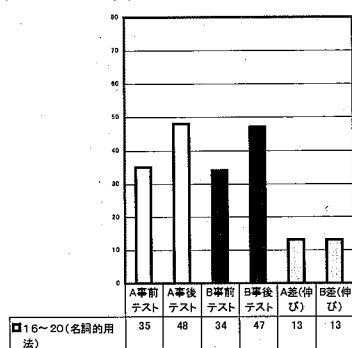
Bクラスの伸びはAクラスをやや上回っているように見えるが、統計的に見ると、t検定値 ( $t=-1.31$ ,  $P<0.09$ ) は両クラスの習熟度には有意な差はないことを示している。しかし、問いごとに個別に見ると、問10を除く他の問いでは、いずれもBクラス为正答率がAクラスを上回っている。よって、総合的に判断すると、やや指導効果ありとみてよい。

グラフ4 問11～問15（関係副詞）



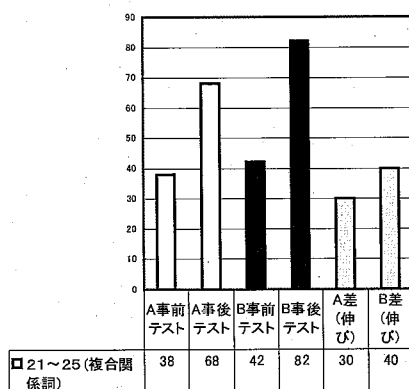
事後テストの正答率は両クラスの数値にかなり差があるように見えるが、t検定値 ( $t=-0.107$ ,  $p<0.45$ ) は両クラスに統計的な有意差は無いことを示している。しかし、問いを個別に見ると、Bクラス为正答率は問14を除くどの問いも、Aクラスより高く、伸びも顕著であるので、やや効果があるとみてよい。

グラフ5 問16～問20(名詞的用法)



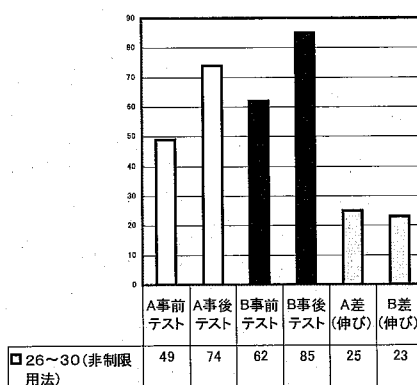
事後テストの結果は、A、B 両クラスの正答率はかなり低く、その差もほとんどないことを表わしている。さらに、t 検定値 ( $t=-0.10$ ,  $p<0.45$ ) は両クラスに統計的に有意な差がないことを示している。

グラフ6 問21～問25(複合関係詞)



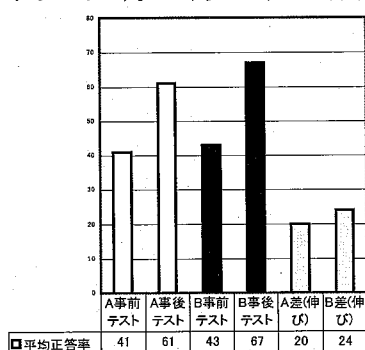
グラフは明らかに両クラスの事後テストの結果に差があることを示している。さらに事前テストと事後テストの伸びにもクラス間には顕著な差が見られる。また、統計的にみても、t 検定値 ( $t=-4.11$ ,  $p<0.0001$ ) は有意な差があることを示しており、指導の効果があるとみてよい。

グラフ7 問26～問30(非制限用法)



グラフは明らかに両クラスの事後テストに差があることを表わしている。B クラスの正答率は A クラスの正答率を 9 点も上回っている。また、統計的にみても、t 検定値 ( $t=-2.8$ ,  $P<0.003$ ) は有意な差があることを示しており、指導の効果があるとみてよい。

グラフ8 問1～問30の平均正答率



グラフは関係詞全体について、両クラスの事後テストの結果に差があり、伸びの差にも違いがみられることを示している。さらに、統計的にみても、t 検定値 ( $t=-2.45$ ,  $p<0.009$ ) は両クラスに有意な差があることを示している。

実験の結果、「節の機能に基づく指導順」に従って関係詞を教えると、関係詞全体の習熟度が上がることが分った。また、前置詞＋関係詞、関係副詞に統計的には有意とは言えないまでも若干の差が生じた。さらに、複合関係詞と非制限用法の関係詞の指導にはかなり効果的であることが明らかになった。

また、グラフ1が示すように、学習者の習熟度には項目ごとにかなりばらつきがあることもわかった。

さらに、問4、9、10、14、20において両クラスとも事後テストの正答率が50パーセントを下回っていたことは、これらの問いに関して本論文で指摘した五つの困難さ以外の要因<sup>(註5)</sup>が関係していることが推測される。

### 3. 5 結論

「節の機能に基づく指導順」に従って関係詞を教えると次の三つの点で効果が見られる。

- (1) 全体的な関係詞の指導に効果がある。
- (2) 複合関係詞と非制限用法の関係詞を含む文の理解には特に効果がある。
- (3) 前置詞＋関係代名詞や関係副詞の理解にもやや効果がある。

### 終わりに

関係詞を教える際は「階層的指導法」と「節の機能に基づく指導順」を用いて指導すると、1章で述べた五つの困難さは克服され、学習者の理解度が増すという結論に至った。しかし、この指導順を用いても、基本的関係代名詞や名詞の用法、関係副詞の一部の問題で学習者の理解度の向上は見られなかった。これらについては本論文で指摘した5つの困難さ以外の要因が関係していると推測される。今後は、これらの関係詞の困難さの原因も探り、さらに効果的な指導法を考えていかなくてはならない。

### 註

- (1) Chomsky (1970) は Xバー理論 (Xbar Theory) の中で主要部の位置と枝分かれ方向に関する二つのパラメーターを指摘している。この理論では、普通文法から個別文法への分化のプロセスを説明するために主要部先頭と主要部末尾という主要部と補部の位置関係の決定に関与する二つのパラメーターを言語習得機構 (Language Acquisition Device) 内に仮定している。
- (2) Flynn (1984) と Hawkins (1989) は関係詞節に見られる構造的な違いに焦点を当て、母語の主要部の位置と第二言語の主要部の位置が異なる場合、第二言語の関係詞を習得することは困難になると主張している。
- (3) 日本語の関係詞節に関して、Bresnan (1970) は日本語のような主要部末尾言語には wh 移動はないと主張している。また時制、数、人称に関する一致は屈折辞という機能範疇に属するが、Fukui (1989) は日本語が機能範疇を持つかどうかに関して機能範疇パラメーターを提案した。この仮説にもとづくと日本語には機能範疇はないことになり、一致は存在しないことになる。
- (4) Universal Operating Principle (Kuno 1974) によると、どの言語においても言語単位の中絶は文の解析を難しくする。左埋め込みの主格関係詞節において、名詞の後に突然 who が現れると解析ができなくなる学習者もいる。一般に一つの文の主語としては二つの名詞句を持つことはありえないのだが、学習者は who を名詞としてとらえることにより、二つの名詞句がある状態に直面し、解析が不能になってしまうのである。その結果、関係代名詞を無視して、次のような解釈をしてしまう。つまり、The boy who broke the vase there was Tom を The boy broke the vase and there was Tom と解釈するのである。
- (5) 関係代名詞と関係副詞の混同、前置詞＋関係代名詞の前置詞の選択ミスなど。

## 参考文献

- 荒木一雄(編) 1999. A Stepping Stone to English Grammar: (『ストーン英文法』) 東京: 数研出版.
- Bresnan, W. Joan. 1970. "On Complementizers: Toward a Syntactic Theory of Complement Types." *Foundations of Language* 6, 297-321.
- Chomsky, Noam. 1970. "Remarks on Nominalization." *Readings in English Transformational Grammar*. Ed. R. Jacobs and P. Rosenbaum. Waltham: Ginn.
- Flynn, S. 1989. "Spanish, Japanese, and Chinese Speakers' Acquisition of English Relative Clauses: New Evidence for the Head-Direction Parameter." *Bilingualism across the Lifespan: Aspects of Acquisition, Maturity and Loss*. Ed. Hyltenstam and Obler. Cambridge: Cambridge UP.
- Keenan, E and Comrie, B. 1977. "Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar." *Linguistic Inquiry* 8, 63-99.
- Kuno, Susumu. 1974. "The Position of Relative Clauses and Conjunctions" *Linguistic Inquiry* 5, 117-136.
- Nakamori, Takayuki. 2002. "Teaching Relative Clauses: How to Handle a Bitter Lemon for Japanese Learners and English Teachers" *ELT Journal* 56, 29-40.
- Ohba, Hiromasa. 1995. "The Learning Order of English Relative Clauses by Japanese Senior High School Students in an Instruction Only Environment." *Journal of Health Sciences, University of Hokkaido*. 21, 19-35.

## 付表1 事前テスト（項目順）

A ( ) に相応しい語を下から選んで入れなさい。

## ① 関係詞の基本用法

- 1 I know the boy (who) broke he window.
- 2 I know the man (whom) you met yesterday.
- 3 I know the house (which) stands over there.
- 4 I know the place (which) you visited last year.
- 5 I know the boy (whose) father is a doctor.

## ② 前置詞＋関係詞

- 6 I know the boy (of) (whom) you talked yesterday.
- 7 I know the girl (with) (whom) he danced.
- 8 I know the house (in) (which) he lived in his childhood.
- 9 I know the team (to) (which) his son belongs.
- 10 I remember the day (on) (which) he left this town.

## ③ 関係副詞

- 11 I know the house (where) he lived.
- 12 I remember the day (when) we first met each other.
- 13 I spoke to the Chinese as often as I could. This is (how) I mastered Chinese.
- 14 This is the point (where) we had a great difficulty.
- 15 Saturday is the day (when) we have no class.

## ④ 名詞的用法

- 16 Show me (what) you have in your hand.
- 17 You can eat (whichever) you find on the tray.
- 18 You can do (whatever) you like here.
- 19 You may invite (whoever) wants to come.
- 20 You may invite (whomever) you like.

who, whom, which, how, whose, when, where, what, whatever, whoever, whomever, whichever, 前置詞＋関係詞

B 下線部を和訳しなさい。

## ⑤ 複合関係詞

- 21 You can invite whoever likes movies.
- 22 She will not change her mind, whoever may say so.
- 23 You can borrow whichever you want to read in the library.
- 24 You will be pleased, whichever you choose.
- 25 He welcomes me whenever I visit him.

## ⑥ 非制限用法

- 26 They have a son, who is a pianist.
- 27 They have a daughter, whom I met at the party.
- 28 I heard the rumor, which was a lie.
- 29 He told a lie, which made his father angry.
- 30 We went to Rome, where we stayed a week.

## 付表2 事前テスト(実施用)

A ( ) に相応しい語を下から選んで入れなさい。

- 1 I know the house ( ) stands over there.
- 2 I know the girl ( ) ( ) he danced.
- 3 I remember the day ( ) ( ) we first met each other.
- 4 You may invite ( ) wants to come.
- 5 I know the place ( ) you visited last year.
- 6 I know the house ( ) ( ) he lived in his childhood.
- 7 You can do ( ) you like here.
- 8 I know the man ( ) you met yesterday.
- 9 I know the boy ( ) father is a doctor.
- 10 This is the point ( ) we had a great difficulty.
- 11 I know the house ( ) he lived.
- 12 Show me ( ) you have in your hand.
- 13 Saturday is the day ( ) we have no class.
- 14 I know the team ( ) ( ) his son belongs.
- 15 I know the ( ) broke the window.
- 16 I remember the day ( ) ( ) he left this town.
- 17 You can eat ( ) you find on the tray.
- 18 I spoke to the Chinese as often as I could. This is ( ) I mastered Chinese.
- 19 You may invite ( ) you like.
- 20 I know the boy ( ) ( ) you talked yesterday.

who, whom, which, how, whose, when, where, what, whatever, whoever, whomever,  
whichever, 前置詞+関係詞

B 下線部を和訳しなさい。

- 21 You can invite whoever likes movies.
- 22 I heard the rumor, which was a lie.
- 23 We went to Rome, where we stayed a week.
- 24 He welcomes me whenever I visit him.
- 25 They have a son, who is a pianist.
- 26 She will not change her mind, whoever may say so.
- 27 They have a daughter, whom I met at the party.
- 28 He told a lie, which made his father angry.
- 29 You will be pleased, whichever you choose.
- 30 You can borrow whichever you want to read in the library.

H NO. NAME

MARKS

## 付表3 事後テスト（項目順）

A ( ) に相応しい語を下から選んで入れなさい。

## ① 関係詞の基本用法

- 1 I know the boy (who) won the race.
- 2 I know the man (whom) you saw at the party.
- 3 I know the church (which) stands on the hill.
- 4 I know the country (which) you visited last year.
- 5 I know the boy (whose) mother is a nurse.

## ② 前置詞＋関係詞

- 6 I know the student (of) (whom) you spoke yesterday.
- 7 I know the child (of) (whom) he took care.
- 8 I know the hall (in) (which) the band had a concert.
- 9 I know the restaurant (at) (which) the writer often went in his youth.
- 10 I remember the day (on) (which) my son was born.

## ③ 関係副詞

- 11 I know the country (where) he lived.
- 12 I remember the day (when) we first watched the movie.
- 13 I practiced listening day after day. This is (how) I passed the English exam.
- 14 This is the case (where) the early bird catches the worm.
- 15 Sunday is the day (when) we have no club activities.

## ④ 名詞的用法

- 16 Tell me (what) you saw there last night.
- 17 You can drink (whichever) you find on the tray.
- 18 You can do (whichever) you like here.
- 19 You may invite (whoever) likes singing.
- 20 You had better ask (whomever) you meet for help.

who, whom, which, whose, when, how, where, what, whatever, whoever, whomever, whichever, 前置詞＋関係詞

B 下線部を和訳しなさい。

## ⑤ 複合関係詞

- 21 You can invite whoever likes music.
- 22 She will not change her mind whoever may say so.
- 23 You can order whatever you want to buy.
- 24 You will be pleased whichever you take.
- 25 He is out whenever I phone him.

## ⑥ 非制限用法

- 26 They have two sons, who are good at skiing.
- 27 They have a daughter, whom I met at the meeting.
- 28 He got a letter, which told his father's death to him.
- 29 He got the first prize, which made us surprised.
- 30 He went to France, where he studied French for two years.

## 付表4 事後テスト(実施用)

A ( ) に相応しい語を下から選んで入れなさい。

- 1 I know the church ( ) stands on the hill.
- 2 I know the child ( ) ( ) he took care.
- 3 I remember the day ( ) ( ) we first watched the movie.
- 4 You may invite ( ) likes singing.
- 5 I know the country ( ) you visited last year.
- 6 I know the hall ( ) ( ) the band had a concert.
- 7 You can do ( ) you like here.
- 8 I know the man ( ) you saw at the party.
- 9 I know the boy ( ) mother is a nurse.
- 10 This is the case ( ) the early bird catches the worm.
- 11 I know the country ( ) he lived.
- 12 Tell me ( ) you saw there last night.
- 13 Sunday is the day ( ) we have no club activities.
- 14 I know the restaurant ( ) ( ) the writer often went in his youth.
- 15 I know the boy ( ) won the race.
- 16 I remember the day ( ) ( ) my son was born.
- 17 You can drink ( ) you find on the tray.
- 18 I practiced listening day after day. This is ( ) I passed the English exam.
- 19 You had better ask ( ) you meet for help.
- 20 I know the student ( ) ( ) you spoke yesterday.

who, whom, which, how, whose, when, where, what, whatever, whoever, whomever, whichever, 前置詞+関係詞

B 下線部を和訳しなさい。

- 21 She will not change her mind whoever may say so.
- 22 They have two sons, who are good at skiing.
- 23 He is always out whenever I phone him.
- 24 He went to France, where he studied French for two years.
- 25 You can invite whoever likes music.
- 26 They have a daughter, whom I met at the meeting.
- 27 He got the first prize, which made us surprised.
- 28 You will be pleased, whichever you take.
- 29 He got a letter, which told his father's death to him.
- 30 You can order whatever you want to buy.

H NO. NAME

MARKS